○スペイン語入門（外国語Ｃ）　留学生センター・助教授・山　下　好　孝

全学教育科目「スペイン語入門」について

私の担当するスペイン語入門、基礎は言語文化部特殊講義および全学教育科目、外国語Ｃ（第三外国語）義を兼ねた講義として開講されている。外国語特殊講義は定員15名の小人数クラスを売り物にしているのだが、外国語Ｃと兼ねることにより、例年40名以上のクラスサイズとなっている。これはスペイン語の潜在的な需要が高いためだと肯定的に解釈している。

スペイン語を開講するに当たって、私は以下の三つの点に留意している。

⑴　明確な到達目標を持つこと。

北海道大学のスペイン語科目は週１回15週のコースを二期（１年）にわたって開講している。限られた講義時間で、どこまで受講生の語学力を伸ばすか考えなければならない。学生の要望は多様である。スペイン語で日常会話をしたい、スペイン語の論文を読みたいなどの希望を聞かされるが、すべてを満足させることは無理である。

私が掲げている目標は、30週の講義を修了すれば、辞書を引きながらスペイン語の新聞が読めるようになるというものである。ただしローカル色の強いスペイン語圏の新聞ではなく、話題がグローバルに展開するインターネット上の新聞を念頭においている。

⑵　講義した内容の理解・定着をはかること

現在の北大生に語学の予習、復習の両方を期待することは非現実的であると考える。そのため私は講義時間内にその日の習得項目を集中して理解し、覚え込んで欲しいと考えている。したがって私の講義は運用練習がかなり取り入れられている。

講義した内容は次回の授業の冒頭に小テストを課すことで定着を確認する。毎回５分程度の小テストを行い、次の週には受講生に返却する。こういった単純な作業の繰り返しが、教育効果をあげているのだと思う。

⑶　音声を重視すること

日本の語学教育は訳読タイプのものか、コミュニケーション重視のものかのどちらかが多いように私は感じている。どちらのタイプにせよ私は語学の基本は「発音」であると信じている。そのため授業中に学生達に何度も発音させ、問題があると指摘するようつとめている。

発音はテープを聞いても身につかない。学習者が発音して、それが適確なものであるかを教師またはネイティブスピーカーに指摘してもらう必要がある。授業中にテープを聞かせる教師もいるがそれは単なる時間つぶしにしかすぎない。

１年間（30回）の講義を終えた学生のために、現在のところ中級や上級の科目が開講されていないことが残念である。それらの学生の要望から、私の所属する留学生センターの教室を借り、週一回のスペイン語自主講座を開いている。スペイン語初級を終えた段階で、辞書を引きながらインターネットのＣＮＮニュース・スペイン語版 WEBページを訳読するというものである。興味のある方は是非参加していただきたい。

1996年からスペイン語を北海道大学で担当しているが、受講生の中からスペイン政府国費留学生（２名）や日本メキシコ政府交換留学生（２名）が出ている。こういった学生が出て来てくれたことは教師冥利につきる。

（yama@isc.hokudai.ac.jp）